スペシャル対談　小和田哲男×春風亭昇太

徳川家康公を語る

日本の戦国時代史研究の第一人者、静岡大学名誉教授の小和田哲男さん。静岡市清水区出身で城マニア、歴史ファンとして知られる落語家の春風亭昇太さん。かねてより親交のある二人が、徳川家康公について熱く語り合った。知られざるエピソードや、家康公の足跡をたどる旅の新しい楽しみ方が満載の対談となった。

小和田　家康というと、一般的には江戸の人というイメージが強いと思うのですが、実は75年の生涯の内、半分以上は静岡県で過ごしています。8歳から19歳までは、今川家の人質として駿府で過ごし、後に織田信長と手を組み、三河国を統一した後、遠江を手に入れると浜松に城を築く。ここでおよそ17年間過ごした後、駿河の駿府城へ本城を移します。この時、駿河では3、4年しか過ごしていませんが、後に大御所として再び駿河に移り、生涯を終えるまでの約10年間暮らしています。

昇太　僕は清水出身なので、家康が人質時代を過ごした清見寺に小学校の頃よく行きました。でも今考えると、世間で言う人質のイメージとは、少し違っていたのではないかと思うんです。織田信長の兄である信広と人質交換してまで、今川家が家康を取り戻そうとしたことや、清見寺というあんな立派なお寺で教育を受けさせたことなど、今川家は家康を非常に重要視していたんじゃないかなと。

小和田　そうだと思います。私も著書には、わざわざカッコを付けて「人質時代」と表記するようにしているんです。というのも、今川義元の「元」の字をもらって改名していること、義元の姪と結婚したこと、清見寺と臨済寺の住職を兼務していた雪斎和尚、つまり当時を代表する高僧のもとで教育を受けていたことなどを見ても、大事にされていることがわかります。

昇太　家康の資質を見抜き、最高の教育環境に置いてエリート教育を受けさせていたという義元の功績も大きいですよね。義元は家康のことを片腕のように思っていたのかもしれませんね。

小和田　その証拠に、家康は大御所になってどこにでも城を造れる身分になった時、駿府を選んでいる。幼い頃のいい思い出があったからでしょう。実際、家康は隠居する場所として駿府を選んだ理由の一つに、駿府は自分にとって故郷のような所だと語っています。昇太師匠がおっしゃるように、かなり優遇された「人質」だったのでしょう。

◉静岡大学名誉教授・文学博士
小和田哲男

×

◉落語家
春風亭昇太

川と山。駿府城は、自然を生かした最強の国堅固の城

小和田　家康が駿府に戻った最大の理由は、立地条件の良さです。大御所になってからの時代を駿府と江戸の「二元政治体制」と称することもありますが、むしろ二つ頭があるのではなく、家康が本当の頭だったと考えた方が自然でしょう。駿府の家康が頭脳で、江戸の秀忠は手足。だから江戸、駿府間およそ180キロというのはリモートコントロールするのにはちょうどいい距離だった。そして何より、国堅固の地であったということ。家康が将軍職を退いて秀忠に譲った時といえば、まだ大阪には淀殿と豊臣秀頼がいましたから、それに対する抑えが必要だった。豊臣方がもし、東海道を江戸に向かって攻めてきたとしても、江戸より西に自分がいることで盾になれるという思いがあったのでしょう。天竜川、大井川、安倍川が流れて、背後には富士山、箱根山がそびえる。非常にうまく地形を生かしています。

昇太　そういった大きな川を自然の堀として考えれば、静岡県全体を一つの城郭と捉えることもできますよね。実に壮大な話で、城マニアとしてはたまらない！静岡県庁別館にある展望ロビーから一望すると、駿府城が本当に良い場所にあるということを実感します。

静岡県庁別館にある展望ロビーから望む駿府城跡と静岡のまち（静岡市）

もちろん、食べ物もおいしかったでしょうしね。

小和田　そうですね。家康は駿府を選んだ理由に、米のおいしさも挙げています。

昇太　静岡の米といえば、お酒もおいしいですね！日本酒好きの友人からも、静岡の酒はものすごく評価が高いんです。

小和田　旧韮山町（伊豆の国市）で戦国時代から江戸初期に造られ、徳川家にも献上されていた日本酒を有志の方が復活させた「江川酒」というお酒も、最近話題になっているそうですよ。

昇太　そうなんですか!?ぜひ飲んでみたいですね。「開運」というお酒は、家康にもゆかりのある高天神城跡の湧き水を使っているそうです。酒好きで城好きの僕にはたまらないエピソードです！ぜひ県外から来られる旅行客の方には、静岡のお刺身と日本酒で酔っ払っていただきたいですね。

小和田　それから家康は、自分で漢方薬を調合するなど、健康オタクとしても有名だったんですよ。あれだけの天下人になって、いくらでもご馳走を食べられるはずなのに麦飯が大好物だったと言われています。陣中食であり、健康食でもある浜納豆も好んで食べていたようです。

昇太　戦で生き残って、食べ物の不摂生で命を縮めていたら意味がないですもんね。戦国武将って、もちろん一人ひとりの資質もありますが、僕は常々ジャンケンみたいなものだと思っているんです。運も強くないと生き残れない。実際家康も、三方ヶ原合戦で敗れているし、本能寺の変でも大脱出劇を繰り広げている。いつ死んでもおかしくないぎりぎりの状況を何度もかいくぐっているわけですから、命ということに対しては人一倍敏感だったのかもしれませんね。

大河川を自然の堀として、静岡県全体を一つの城郭と捉えると、実に壮大ですね！

――小和田哲男

小和田　静岡県内には、本当にたくさんの家康ゆかりのスポットがあります。先ほど登場した静岡市の臨済寺や清見寺をはじめ、袋井市の可睡斎、静岡市の増善寺、その他にも家康に関わりのある女性たちが眠る寺など、寺院巡りも家康旅の楽しみ方の一つです。

昇太　家康がこの道を、この階段を歩いたんだと想像するとわくわくします。教科書の中だけで勉強する歴史とは、まったく違った感じ方ができますよね。それから、城マニアのみならず、甲冑好きでもある僕としては、久能山東照宮もおすすめ！東照宮にある博物館には、家康ゆかりの品々をはじめ本物の甲冑や刀剣が収蔵されていて、日本人の美に対するこだわりを感じます。ぜひ本物を目にして、当時の人たちの思いを感じてほしいです。

高天神城跡遠景（掛川市）

小和田　その他にも、浜松城の基となった引間城跡が残る浜松東照宮や、三方ヶ原の犀ヶ崖古戦場など見どころは尽きませんね。特に、三方ヶ原合戦の死者を祀るために建てられた宗円堂、家康の身代わりとして命を落とした夏目次郎左衛門吉信の石碑など、古戦場跡周辺は興味深いスポットがたくさんあります。

夏目次郎左衛門吉信の石碑（浜松市）

昇太　僕は高天神城跡を訪れるとキュンとしちゃいます（笑）。徳川、武田両軍の決戦場となり、武田家崩壊のきっかけとなった城でもあるわけですが、ここの城番である岡部元信の兄と家康は人質時代の親友だったから当然元信の事も知っていたでしょう。家康は高天神城を攻めた時、元信の降参を受け入れようとしますが、信長から許しが下りず、しぶしぶ高天神城を攻め落とします。でもその後、岡部一族を優遇しているところに家康の懐の深さや人間味を感じて、しんみりしてしまうんです。

小和田　同じく中部エリアですと、掛川城一帯も外せないエリアですよね。周囲には、今川氏真が掛川城に逃げ込んだ際、家康が包囲するために造った陣城跡がいくつか残ります。

昇太　史跡の善し悪しは決して大きさではないですよね。その裏に秘められた人間ドラマや背景が、今の時代に生きる我々の心を動かすと思います。

小和田　家康が天下を取れた最大の要因は、歴史を学び、信長や秀吉という前を走っていた人たちの良い面、悪い面をしっかりと分析し、悪いところは正し、良いところは取り入れようと貪欲に学んだことでしょう。

昇太　家康って、戦国レースの中で常に上位集団にはいるんだけど、いつも集団の後方にいる。良く言えばガツガツしていないというか、自分の持っている力の範囲で、身の丈に合ったことをコツコツと積み上げるタイプ。これって、すごく静岡県民っぽいなって思うんです。静岡の人って全体的に穏やかというか、大らかというか…。

家康は、前を走る人の行いを冷静に分析しながら、着実に力を付けた人物ですね。

「コツコツと積み上げる謙虚な家康の姿勢は静岡の県民気質に通じる!?」

――春風亭昇太

小和田　良く言えばガツガツしていないというか、自分の持っている力の範囲で、身の丈に合ったことをコツコツと積み上げるタイプ。これって、すごく静岡県民っぽいなって思うんです。静岡の人って全体的に穏やかというか、大らかというか…。

小和田　確かに「俺が俺が」という気質はあまりないかもしれませんね（笑）。歴史を学び、先人の心に触れ、実際に現地を歩いて家康の息吹を感じていただきたい。そうすると、歴史がさらにおもしろくなると思います。

おわだ　てつお
静岡大学名誉教授・文学博士。1944年静岡市生まれ。専門は日本中世史、戦国時代史。研究書のみならず、歴史をわかりやすく、楽しく伝える著書を多数刊行。NHK大河ドラマ時代考証の担当歴も多数。

しゅんぷうていしょうた
1959年清水市（現・静岡市清水区）生まれ。日本テレビ『笑点』大喜利メンバーとして、幅広い世代から支持を得る。自他共に認める「城マニア」で著書に「城あるきのススメ」（小学館）がある。